

# 親称の “Thou” と敬称の “You”

— 英語における 2 人称代名詞の歴史について —

荻 部 恒 徳

Peter Trudgill が *Sociolinguistics* (1974; 1995 3rd. ed.) で社会言語学的視点から親称と敬称の 2 人称代名詞についての問題を取り上げている。その 87 頁には主要現代ヨーロッパ語における敬意・丁寧表現として相手への呼びかけに用いる敬称の 2 人称 (フランス語で代表させて ‘polite vous’ という) と親しい者や目下の者に用いるに 2 人称単数形 (これもフランス語で代表させて ‘familiar tu’ という) の対照表を掲げている。

第 1 表

	familiar	polite
French	tu	vous
Italian	tu	Lei
Spanish	tú	usted
German	du	Sie
Dutch	jij	u
Swedish	du	ni
Norwegian	du	De
Greek	esi	esis
Russian	ty	vy

この表に英語が入っていないことに、というよりは、他の主要ヨーロッパ語にはなぜそのような用法が存在するのか不思議に思われる向きもあるかもしれな

いが、Shakespeare や Chaucer を読んだことのある人なら分かるように、初期近代英語期や中英語期には英語にも存在した用法なのである。しかしその後英語特有の理由により現代英語には見られなくなったのである。英語でも古英語では人称代名詞は第2表に掲げるパラダイム通りの用法であったので、これを出発点に英語における2人称代名詞の歴史をたどることにする。

第2表（2人称代名詞。属格形・再帰形は省略）

	Singular		Plural	
	Nominative	Dat/Acc	Nominative	Dat/Acc
OE	þū	þē/þec, þē	gē	ēow
12c	þu	þe	þe	þeu, þu
1300	þou, ye	þe	ye	þiu, yu
14c	thou, ye	thee, you	ye, you	you
15c	thou, you, ye	thee, you	you, ye	you, ye
16c	thou, you, (ye)	thee, you	you, ye	you, ye
1700	you, (thou)	you, (thee)	you, (ye)	you, (ye)

上記の表を説明すると、先ず OE では、用法はこのパラダイム通りで、2人称単数主格は þū、与格は þē、対格は þec, þē で、複数主格は gē、与格/対格は ēow で文法の指示通りに用いられた。ME 期に入り12世紀まではパラダイムの変化はない。しかし文字表記の慣用に従い、発音は変わらないが、長音符のマクロンを略し、g を þ に代えたほかは、目的格の OE ēow に発音の変化が生じ þeu, þu になったことが注目される。1300年頃になると、複数主格の ye が単数主格にも用いられるようになり、パラダイムの異同が始まる。ここで、ye, you の初出例とその年代を扱うに際して、Michigan 大学出版の *Middle English Dictionary* の当該項目を含む分冊が未刊で、その資料が利用できないため OED の資料に頼らざるを得なかったことをお断りしておく。

*OED* によれば (ただし作品の制作年代は *MED* による), 単数主格の *ye* の初出例は c1300 R. Glouc. (Rolls) 1341 Sire emperour quap þe erl þo, nebe 3e no so bolde. (= ‘Sir Emperor’ said the earl then, ‘Be not ye so bold.’) である。(以下, 例文・引用文の現代英語訳と和訳は筆者)。

14世紀の間に複数目的格の *you* が *ye* と並んで複数主格に用いられ始めた。*OED* の初出例は a1325 *Cursor Mundi* 23160 (Göt.) Vnto mi blis haf 3ue na right. (= You have no right to my happiness.) この世紀の間に *you* は更に単数目的格にも用いられ始めた。*OED* の初出例は ?a1325 Bonaventura’s *Medit.* 314 My wurschypful fadyr, ..Here my bone..For sorowe my soule haþ 3ow so3t. (= ‘My worshipful Father, ..Hear my prayer..For sorrow my soul has sought you.’) である。15世紀に *you* は最後に単数主格にも用いられ, 結局 2 人称のすべてに拡大される。単数主格の *OED* の初出例は ?a1475 Guy W.(Cambr. MS) 4192 ‘Syr Gyr,’ he seyde, .. ‘Tomorowe schall yow weddyd bee.’ (= ‘Sir Guy,’ he said, .. ‘Tomorrow you shall be wedded.’) である。

英語における 2 人称の問題は, 1300年頃から 2 人称単数に複数形の *ye* と 15 世紀には *you* が, 現代主要ヨーロッパ語におけるように, 最初は単数の目上の者に対する丁寧な呼びかけの敬意表現として用いられたことに始まる。この用法の起源はどこにあり, どのような経路で英語に持ち込まれたのであろうか。直接的にはノルマン王朝がイングランドに持ち込んだ Anglo-Norman French の 2 人称複数形の敬意表現が英語に適用されたと考えられるので一種の言語接触の結果である。この敬意表現は, 古くはラテン語における plural of majesty 「君主の複数」(royal we) として 1 人称複数形を用いるローマ皇帝に対し, 廷臣達が plural of reverence 「敬意の複数」として 2 人称複数形で呼び掛けた用法から来ているという。この習慣は古典・中世ラテン語 (tu: vos, vester) や第 1 表に挙げたロマンス諸語やゲルマン諸語やロシア語におよび, これらの言語では 2 人称には本来の単数形と敬意の複数形とが並存

する結果になり、両者間に用法の違いが生じてくる（中尾・児馬，1994，37-46頁参照）。第1表に見られるように、敬意表現に2人称複数形（フランス語，スウェーデン語，ノルウェー語，ギリシア語，ロシア語），3人称複数形（ドイツ語），3人称女性単数形（イタリア語）や「貴殿の恵み」（スペイン語），「貴殿」（オランダ語）のような敬称などが元になっていることについては、「そこに含まれる一種の間接性が，相手に対する遠慮，敬意，尊敬の念といった心理の表明につながってゆくのである。」（下線筆者，鈴木孝夫，1996，160頁）といった原理が働いているのであろう。英語でも前述のように1300年頃から敬意の *ye*，15世紀からは敬意の *you* が現れ，本来の *thou* との間に対照的な用法の違いが生じるのであるが，その分析に入る前にTrudgillの前掲書から次の第3表（p. 89）を引用して説明したい。

第3表

		Stage 1		Stage 2		Stage 3		Stage 4	
		S	NS	S	SN	S	SN	S	SN
a)	+P → +P	T	T	V	V	T	V	T	V
b)	-P → -P	T	T	T	T	T	V	T	V
c)	+P → -P	T	T	T	T	T	<i>T</i>	T	V
d)	-P → +P	T	T	V	V	V	V	T	V

P = power                      S = solidarity                      NS = no solidarity

Stage 1: original situation, only singular and plural distinguished

Stage 2: introduction of the power factor, non-reciprocal usage between c) and d).

Stage 3: introduction of the solidarity factor, points of conflicts of the two factors italicized.

Stage 4: resolution today of the conflict in favour of the solidarity factor.

表は power ファクターのあるなしの +P（権力者）と -P（非権力者）によ

る4通りの組み合わせで T と V (フランス語の *tu* と *vous* の記号で、英語では今問題にしている *thou* と *you* に相当することは言うまでもない) の分布がどうなるかをモデル化したものである。+P とか -P とかという表現は余りにも政治的・社会的差別を前提としたイデオロギー的分類に思えなくもないが、ここではもっと広く、身分の高い貴族や上流階級の人と身分の低い下流階級の人、主人と使用人、親と子、兄と弟、教師と生徒、封建制下の男と女等の記号と考えてよいだろう。Roger Brown and Albert Gilman (1960) に従った *solidarity* ファクターの導入は特に第3・4段階に適用されるものだが、S (仲間意識あり) と NS (仲間意識なし) のを基準にして、相手に親近感を持って接する場合と身分差を意識して他人行儀で接する場合とを社会的に巧みに記号化してモデルに組み込んでいる。この表は現代主要ヨーロッパ語の2人称が歴史的にたどったと考えられる4段階を見るためのモデルであり、英語はこれらの言語とは途中から異なる方向をたどったとはいえ、英語の歴史のある段階がこのモデルのどの段階にあるかを見てみる価値があろう。そういうわけで次に英語の歴史がどのようにこのモデルに適用されうるかを検証してみたい。

まずこのモデルの第1段階は本来の状態で、2人称代名詞には単数・複数で異なる語形があり、単数の相手には単数形を複数の相手には複数形を使用する段階である。古英語と13世紀までの初期中英語の段階がこれに相当する。第2段階は権力差・身分差による代名詞の選択の違いが出てきた段階であり、身分の低い者が高い者に敬意を表す複数の2人称 *ye, you* を用い (上記第3表の d)), 逆に高い者は低い者に敬意を含まない単数の2人称 *thou* を用いる (c))。ここで興味深いのは、身分の低い者同士は単数を用いるのに、身分の高い者同士 (例えば貴族) では低い者から呼び掛けられる敬意を表す複数の2人称をお互いに用いたことである。この場合同一身分間では同じ代名詞を用いる *reciprocal* な、異身分間では異なる代名詞を用いる *non-reciprocal* な用法が特徴となっている。第1、第2段階ではまだ *solidarity* のファクターは入ってこない (第3表はこれらの段階に S/NS を入れているがない方がよい)。

第3段階を見てみよう。まず重要なのはこの段階から solidarity のファクターが働くことである。高い身分の者同士でも仲間意識が働くことと単数形を用いるし (a)), 逆に身分の低い者同士でも仲間意識が働かないことと複数形を用いて (b)) 他人行儀を表すようになって、同一身分間でも non-reciprocal になった。第3段階で注目すべきは表下の説明にあるように、仲間意識が導入されたことによって (異身分間の代名詞の使用が表面的には相変わらず non-reciprocal に見えても)、これと power のファクターとが競合する事態が生じたことである。この表のイタリック体の *T* と *V* に注目していただきたいのだが、高い身分の者が低い者に呼び掛ける場合に仲間意識がなくても仲間意識があるときと同じ単数形 (*T*) を用いることに抵抗を感じ、同様に身分の低い者が高い者に呼び掛ける場合に仲間意識があっても、身分差を考え複数形 (*V*) を用いるが内心は納得していない状況であると筆者は解する。この葛藤は第4段階で power のファクターが解消されることによって解決される。

第2・第3段階が当てはまる英語は14世紀から1700年頃までの英語である。次にこの期間に入る Chaucer と Shakespeare における2人称単数の用法を見てみたい。Chaucer の用いた2人称の語形は単数主格が *thow*, *thou*, *ye* で、目的格が *the(e)*, *you* であり、複数主格は *ye*, *you* で、目的格は *yow*, *you* である。なお、Chaucer におけるこの問題の取り扱いについては Kerkhof (1966, pp. 135-39), Burnley (1983, pp. 16-22) などが参考になる。*The Canterbury Tales* の *The Nun's Priest Tale* では、雌鶏の Pertelote と夫の雄鶏である Chauntecleer は終始互いに宮廷貴族風に ‘*polite ye*’ を用いていて、上流階級同士の対称詞が *ye* であることを示している。妻が臆病な夫を罵るときにも、夫が弁明するときも *ye* である。(以下、引用文に用いた下線はすべて筆者による。)

And whan that Pertelote thus herde hym roore,  
She was agast and seyde, “Herte deere,

What eyleth you, to grone in this manere?

Ye been a verray sleper; fy, for shame!”

And he answerde, and seyde thus: “Madame,  
I pray yow that ye take it nat agrief.”

(*The Riverside Chaucer*, VII. 2888-93)

ペルテローテがこんな風に夫がうなるのを聞いたとき、

彼女は驚いて言った。「愛しいお方、

こんなにうなされて、あなたどうなさったのですか？

あなたはほんとに眠っていたのに、まあみっともないわ!」

すると彼は答えて次のように言った。「奥よ、  
お願いだからあなたはそんなに深刻に受け取らないでくださいな。」

次に同じく Chaucer の *The Parson's Prologue* から、話し手の最後の番  
が回ってきた教区司祭に宿の主人がややからかい気味に、

“Sire preest,” quod he, “artow a vicary?  
Or arte a person? sey sooth, by thy fey!  
Be what thou be, ne breke thou nat oure ley;  
For every man, save thou, hath toold his tale.”

(*The Riverside Chaucer*, X. 22-25)

「お坊さん、あんたは教区の助任司祭かね、  
それとも主任司祭かね。誓って本当のことを言ってくんなさい。  
お前さんが何であれ、わしらの話を折らんでくんなさい。  
あんた以外はみんなが話をしたんだからね。」

と述べるときには、すべて ‘familiar thou’ を用いているが、教区司祭が自分はこれまでの人のように物語ではなく、教訓話をしたいという、主人は態度を変えて ‘polite you’ に切り替える。前の引用ではそうではなかったが、敬称 sire (=sir) で呼び掛けるときに ‘polite you’ が共起しやすい。

“Sire preest,” quod he, “now faire yow bifalle!  
Telleth,” quod he, “youre meditacioun.  
But hasteth yow, the sonne wole adoun;  
Beth fructuous, and that in litel space,  
And to don wel God sende yow his grace!  
Sey what yow list, and we wol gladly heere.”

(*The Riverside Chaucer*, X. 68-73)

「お坊さん」と彼は言った、「あなた様に幸運が降りますように。  
あなた様の瞑想とやらを話して下され。」と彼は言った。  
「だが、急いで下され、お日様が沈みますからな。  
爽り豊かな話を短い時間でお願いしまさぁ、  
うまく行くように神様がお恵みをあなた様に下さるように。  
あなた様のお好きなように話して下さりゃ、あっしらは喜んで聴きますよ。」

Chaucer からもう一つ例を取ってみる。*The Miller's Tale* ではいろいろな人物の組み合わせによる対話が行われているが、大工の John と下宿人の Oxford の学生である Nicholas は互いに ‘familiar thou’ を用いており (ll.3490-95, 3501-12), これは庶民の対等者同士の呼び掛けであろう。大工の若妻の Alison は Nicholas に言い寄られたとき最初一度だけ “I wol nat kisse thee, by my fey !” (l. 3284) 「絶対、あんたにキスなんかしないわ」



と（多分突然のことに怒って）‘familiar thou’ を用いるが、すぐ落ち着きを取り戻し、“Do wey youre handes, for youre curteisye!” (l. 3287) 「お願い、お行儀よくあなたの手をのけてくださいな」からは、‘polite ye’ に変わる。この Alison の切り替えの素早さに対する Chaucer の絶妙な描写には聴衆・読者は舌を巻く。相手の Nicholas は彼女に常に ‘familiar thou’ を用いる。Alison に横恋慕する教区書記の Absolon に彼女は常に ‘familiar thou’ で呼び掛ける (ll. 3708-11, 3718, 3720, 3728-29) が、これは彼を馬鹿にしているからであろう。Absolon の方は Nicholas と仲良くしている彼女の寝室の窓下で愛の告白をしてキスをして下さいと言うときはずっと ‘polite ye’ だったが (ll. 3698-3707), 彼女が彼をからかってやろうと、(このとき彼女は Nicholas に “Now hust, and thou shalt laughen al thy fille.” (l.3721) 「さあ静かにしてたら、お前さんをたっぷり笑わせてあげるよ」とささやくときには ‘familiar thou’ になっている。これはすでに遠慮の要らぬ仲になったからであろう。) キスをしたらあっちへ行くかという問いに有頂天になった Absolon は “Lemmman, thy grace, and sweete bryd, thyn oore!” (l.3726) 「愛する人よ、君の情けを、小鳥さんよ、君の哀れみを！」と愛人になれると誤解して ‘familiar thou’ に切り替える。以後、復讐に燃えて鍛冶屋から真っ赤に焼けた鍬の刃を持って戻ってきた Absolon は愛人の振りをして ‘familiar thou’ で彼女に呼び掛ける (ll.3792-97)。

この Absolon にも鍛冶屋の Gerveys は彼と分かってからは ‘polite ye’ で呼び掛け (ll. 3766-71), 最後に、焼けた鍬の刃を貸してくれと言われて、気前良く金であれ金貨であれ持っていけという件だけ “Thou sholdest have,…” のように thou になっている。Absolon が彼に終始 ‘familiar thou’ で呼び掛ける (ll. 3775-78, 3783-84) のは両者の身分の差を表しているのであろう。

*MED* の thou の項に示された定義を参考までに挙げておく。

- (a) 自分の子供, 弟子, 従者, 社会階級の低いか恵まれない地位のものなどに用いる。
- (b) 親, 主人, 領主, 王, 権力や権限を持つ地位のものなどに用いる。
- (c) 神, キリスト, マリア, 異教神などに用いる。
- (d) 配偶者, 愛人, 同僚, 敵対者, 身分が同等のものに用いる。
- (e) 叱責・軽蔑・脅し・挑戦などの対象者に用いる。
- (f) 鳥・物体・場所・抽象物・擬人化したものなどに用いる。
- (g) 読者や物語り・説教・談話などにおける想像上の聴衆への呼びかけに漠然と用いる。

ここで注意すべきは上記の用法は1300年頃以降の ‘polite ye’ の導入後 thou がこれら (a)~(g) に対する呼びかけの marker となったのであるから, MED 収録の1000年頃から1300年頃までの用例を上記のように分類するのは定義の先き取りとも言えるものである。事実は1300年頃までは1人の相手に対する呼びかけには相手が誰であれ2人称単数の thou を用いたのでこれは変なのだが, 中英語期の約500年間を扱う辞書という性格上やむを得ない。ついでに一言すれば, Shakespeare とほぼ同時代の Authorized Version では ‘polite ye, you’ は使われず, OE と同じ用法(単数が thou — thy — thee, 複数が ye (you) — your — you) を保ったが, これは聖書翻訳という特殊性によるのである。

次に Shakespeare におけるこの問題を覗いてみたい。大塚高信 (1976, 48-51頁), Brook (1976, pp. 72-75), Scheler 著岩崎・宮下共訳『シェイクスピアの英語』(1990, 30-33頁), Crystal (1995, p. 71) が参考になる。幸いこの問題を *Richard III* について詳しく検証したすぐれた論文 (Barber, 1981) があるのでこれを参考に少し述べる。その前に, Shakespeare における2人称単数の語形を見ると, thou, thy, thine, thee, thyself のthou 系列と you, (ye), your, yours, you, yourself の you 系列の基本的には Chaucerと同じ

2本立てであり、前者を ‘familiar thou’, 後者を ‘polite you’ と呼ぶことにする。

*Richard III* の場面は第1幕, 第4場, 野心に燃える実弟の Gloucester 公(後の Richard 3世)の奸計によってロンドン塔に幽閉された Clarence 公に送られた二人の刺客が Clarence 公が眠っている間に交わす対話では (ll. 109-160), 互いに ‘familiar thou’ を用いている。これは刺客が身分の低い者同士であることを示している。やがて目を覚ました Clarence 公は彼らと次のような会話を交わす。

- Clar.* In God's name, what art thou?
1. *Mur.* A man, as you are.
- Clar.* But not, as I am, royal. 165
- [2.] *Mur.* Nor you, as we are, loyal.
- Clar.* Thy voice is thunder, but thy looks are humble.
1. *Mur.* My voice is now the King's, my looks mine own.
- Clar.* How darkly and how deadly dost thou speak!  
Your eyes do menace me. Why look you pale? 170  
 Who sent you hither? Wherefore do you come?
- [*Both.*] To, to, to—
- Clar.* To murder me?
- Both.* Ay, ay.
- Clar.* You scarcely have the hearts to tell me so, 175  
 And therefore cannot have the hearts to do it.  
 Wherein, my friends, have I offended you?
1. *Mur.* Offended us you have not, but the King.
- Clar.* I shall be reconcil'd to him again.

(*The Riverside Shakespeare*, I. 4. 163-79)

- クラレンス いったい、お前は何者だ。
- 刺客 1 人間でさあ、あなたと同じ。
- クラレンス だが、わしのように、王家の者ではないな。 165
- 刺客 2 あなたは、あっしどもと違って、不忠者でさあ。
- クラレンス お前の声は雷だが、お前の顔つきは卑しいな。
- 刺客 1 あっしの声は今王様の声で、顔つきはあっしの物で。
- クラレンス お前の話し方はなんと暗く怖ろしいことか！ 169
- お前らの目はわしを脅かす。お前らの顔はなぜ青い？  
お前らは誰の使いでここへ？お前らの来た目的は？
- 刺客 1, 2 それは、その…
- クラレンス わしを殺すためか？
- 刺客 1, 2 へい、そうなんでさあ。 174
- クラレンス お前らは自分でわしにそう言う勇気がないんだから。  
それを実行する勇気があるはずがない。  
どこでわしが、友よ、お前らを害したというのか？
- 刺客 1 あなたはあっしらではなくて、王を害されたんでさあ。
- クラレンス 王とならまた仲直りしよう。

この場面では、クラレンス公は刺客達の 1 人に呼び掛けるときには常に ‘familiar thou’ を、2 人に呼び掛けるときは複数の you を用い、刺客達はクラレンス公に呼び掛けるときは常に ‘polite you’ を用いており、身分の上下関係が示されている。しかし、この先で (ll. 201-31), クラレンス公が殺人の不当を訴え、神罰が下ると刺客を脅かすと、彼らは怒って突然これまでの you を thou に切り替える。この thou の用法は ‘angry thou’ とでも言ってよいもので、それまで ‘polite you’ を用いていた者が怒りあるいは愛しさといった感情の激変に応じて切り替える thou なのである。

興味深いことには、切り替えがもう一度行われるのである。両者の間で罵り

合いが続き、クラレンス公がエドワード王にわしの死の知らせを持って行くより、実弟のグロースター公にわしの生存の知らせを持っていく方が報酬を多くもらえる筈、と殺人を思いとどまらせようとするとき (II. 229-31)、刺客達は彼が可哀想に実弟に裏切られているのを知らないのを見て、急に精神的に優位になり怒りを鎮め、これ以降再び you に戻る (II. 232-70) が、今度の you は単に身分差の marker としてだけではなく、Barber が言うところの ‘one of patronizing contempt’ (p.167/277) といった複雑な感情をも表していると言える。

およそ1700年以降、2人称単数の thou 系列が下記のように用法を限定していき、‘familiar thou’ と ‘polite you’ の対照が消失して、標準英語では you 系列への一元化が果たされる。Trudgill の上記第3表の第4段階は現代の主要ヨーロッパ諸語の達している段階であるが、民主化が、少なくとも、そのイデオロギーが進んだ現代ヨーロッパにおける T/V の用法のファクターは power より solidarity が優先される。相手が仲間であれば reciprocal な T、なければこれもreciprocalな V となるのである。Trudgill によれば、「たとえば将校が兵士に話しかける場合、T で話して V で受ける代わりに、現在では将校も兵士もどちらも V を使う。なぜなら両者の関係は、どちらの側から考えても、仲間意識のある関係とは言えないからである。」(岩波新書、120頁) もう一つ注意すべきは、『エリザベス朝英語概説』のフランス人の著者、Michel Poirier が「概して thou を使うことと、you を使うことの区別は現在のフランス語に見られる区別と同一であるが、非常に重要な相違がある。フランス人は vous あるいは tu をだれか相手に規則的に使い、そして彼がこの習慣を変えるなら、例えば友情、愛情、恋愛の影響下で複数から単数へはつきり移るためである。」(訳書、112頁) と述べているように、フランス語の場合、代名詞を変えることは習慣的な対人関係も変えることになる点である。

先に見た Chaucer や Shakespeare の段階は基本的にはこの表の第2・第3段階を合わせた幅広い範囲に当たるわけだが、分析対象の作品や登場人物の

身分などの違いによりいろいろな偏りが見られることが予想され、一般化してこの表に当てはめることはできないであろう。power や solidarity のほかに感情 (emotion) のファクターが加わり更に複雑になり、同じ相手にも ye, you から thou へ、また thou から ye, you へと一つの場面でも切り替わるのが大きな特徴である。英語は第4段階を経ないまま現在に至った。先に述べたように thou の特殊用法化が進んだと言うより、本来すべての2人称単数を指していた状態から次第に複数形から来た ye, you に取って代わられ指示範囲が制限されたからであろう。現在の英語の状況を無理に第3表に組み込むとすれば、第5段階を設けてすべてのスロットに V を入れることになろうが、あまり意味のあることには思えない。何故なら現代英語ではもはや you は ‘polite vous’ (V) に相当するものではないからである。中英語から近代英語までの ‘familiar thou’ は今では一部の Quakers 同士や、方言で親が子に、また親しい者同士で用いるほかは、神やキリストへに呼びかけや説教・詩歌・格調高い散文に用法が限られている。(OED, s.v. thou)

このように現代の英語は相手が仲間同士か否かの判断・区別を2人称代名詞によらない、別の方法で行っている。その一つは仲間には John のように first name で呼び、仲間意識のない相手には Mr./Dr./Prof. Smith のように敬称を last name に付けて呼び掛ける方法である。(東 (1997), 136頁参照) もう一つは命令文と丁寧な依頼文との、例えば仲間の相手には Close the window. といい、仲間意識のない相手には Will [Would/Could] you please close the window?/Would you mind closing the window? と言って使い分ける方法である。(大野 (1999), 165-67頁参照)

#### REFERENCES

- 東 昭二著 (1997). 『社会言語学入門』研究社出版。  
 Barber, Charles (1981), “‘You’ and ‘thou’ in Shakespeare’s *Richard III*”,  
 Leeds Studies in English, New Series XII (1981), 273-289 (Reprinted in  
 V. Salmon and E. Burness (eds.). *Reader in the Language of*

*Shakespearean Drama*. (John Benjamins, 1987.)

- Benson, Larry D. ed. (1987 3rd ed.). *The Riverside Chaucer*. Boston, MA: Houghton Mifflin.
- Brook, G. L. (1976). *The Language of Shakespeare*. London: André Deutsch.  
三輪春伸・佐藤哲三・濱崎孔一郎ほか共訳 (1998) 『シェイクスピアの英語』松柏社.
- Brown, R. and A. Gilman (1960). ‘The Pronouns of Power and Solidarity’, in T.A. Sebeok (ed.), *Style in Language*, pp. 253-76. MIT Press.
- Brunner, Karl (1960, 1962). *Die englische Sprache : Ihre geschichtliche Entwicklung*. Max Niemeyer. 松浪・小野・忍足・秦共訳 『英語発達史』大修館書店.
- Crystal, David (1995). *The Cambridge Encyclopaedia of the English Language*. Cambridge U.P.
- Evans, G. Blakemore, ed. (1974). *The Riverside Shakespeare*. Boston, MA: Houghton Mifflin.
- Kerkhof, J. (1966). *Studies in the Language of Geoffrey Chaucer*. Universitaire pers Leiden.
- Kurath, Hans (1954-). *Middle English Dictionary*. U. of Michigan P. [MED]
- Murray, J.A.H., Henry Bradley, W.A. Craigie & C.T. Onions, eds. (1884-1928, 2nd ed.1989) *Oxford English Dictionary*, 2nd ed. on CD ROM. Oxford U.P. [OED]
- Mustanoja, T.F. (1960). *A Middle English Syntax, Part I: Parts of Speech*. Helsinki : Société Néophilologique.
- 中尾俊夫・児馬修共編 (1990). 『歴史的にさぐる現代の英文法』大修館書店.
- 大塚高信 (1976). 『シェイクスピアの文法』研究社出版.
- 大野 晋 (1999). 『日本語練習帳』岩波新書.
- Poirier, Michel (1966). *Précis d'anglais élisabéthain*. Paris. 手塚喬介・秋元実治訳注 (1979) 『エリザベス朝英語概説』篠崎書林.
- Scheler, Manfred (1982). *Shakespeares Englische: Eine Sprachwissenschaftliche Einführung*. Berlin: Erich Schmidt Verlag. 岩崎春雄・宮下啓三共訳 (1990). 『シェイクスピアの英語』英潮社新社.
- 鈴木孝夫 (1986), 『教養としての言語学』岩波新書.
- Trudgill, Peter (1974, 1995 3rd ed.). *Sociolinguistics : An Introduction to Language and Society*. Penguin Books. 土田滋訳 (1975) 『言語と社会』岩波新書.

(1999. 4. 30受理)